

令和六年度卒業証書授与式 式辞

今年の冬は雪がたくさん降り、校舎も校庭もずいぶん長い間、雪に覆われました。ようやく雪がとけたかと思いましたが、今朝は雪。こういうのを「別れを惜しむなごり雪」というのでしょうか。本日、中本町議会議長様をはじめ、ご来賓の皆様、保護者の皆様のご臨席を賜り、卒業証書授与式を行うことができ、感謝申し上げます。

14名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今、皆さんに手渡した「卒業証書」は、「六年間小学校でがんばった証」です。この証書を手にするまでに、自分を陰ながら支えてくださった多くの方への感謝の気持ちを忘れず、大切にしてください。

卒業していく皆さんに、「ちがいは宝物」という話をしたいと思います。

詩人 金子みすゞさんの有名な詩の一節

「みんなちがってみんないい」

皆さんもよく知っている一節です。私たちは、誰かと同じだと安心します。自分と考えが違っていても、「まあいいか」と自分の考えを抑えてしまったり、周りとは違う考えや行動をする人を見て、その人がおかしいと決めつけてみてしまったりすることはありませんか。あるいは誰かと比べて、自分はダメだと感じてしまうことはないでしょうか。

皆さんも取り組んだマーチングを例に「ちがいは宝物」について考えてみましょう。もし、演奏する楽器がトランペットだけだったらどんな演奏になるか想像してみてください。同じ音色、同じメロディーだけでは、なんとも単調な演奏になりそうです。でも、実際は違います。トランペット、トロンボーン、アルトホルン、ユーフォニウム、チューバ、そして、様々な音色の打楽器たちで編成されています。それぞれの楽器の中でも、パートが2つに分かれているものもあります。違う音色の楽器が、違うメロディーを奏でる—それが加計小のマーチングバンドです。ちがう音色が重なり合うからこそ、楽しい音楽を奏でることができます。そして、その違う音色を聞きながら、息を合わせ、みんなで1つの曲を創り上げるからこそ、聴く人の心に届く演奏ができるのです。毎年、マーチングバンドのメンバーは変わります。同じ楽器編成でも、出来上がった曲の印象は変わります。だから、今年の演奏は、今年のメンバーでしかできないものでした。私はそこに価値があると思っています。「一人一人がちがうからこそ、生み出されるものは輝く」のです。最初に言った「ちがいは宝物」とはそういうことです。

バンドフェスティバルでの発表を終え、いよいよ4年生に楽器を譲る日の朝、6年生が私のところにきて言いました。

「校長先生、本当の最後にもう一度だけ交流ホールで演奏させてもらえないでしょうか。」突然の申し出でしたが、すぐに交流ホールに加計小の全員が集まり、6年生による本当のラストコンサートが始まりました。演奏が終わり、大きな拍手が贈られました。その後、改めて私のところに6年生全員がやってきました。

「校長先生、演奏させてくださってありがとうございました」と笑顔がいっぱいです。

加計小学校で長年マーチングバンドが続いてきた理由はここにあると思う出来事でした。最後まで、自分たちの演奏を追究し楽しんで演奏した皆さんの姿を私はずっと忘れることはないでしょう。

金子みすゞさんの詩の一節の後に、加計小の私たちはこの一節を付け加えましょう。

「みんなちがって みんないい

みんなちがって だからいい」

「ちがいは宝物」—このことは勉強でも、スポーツでも、生活でも、何かを乗り越えたときにこそ力を発揮します。自分とちがう考えや感じ方の人と出会い、話を聞き、考えを伝え合う—そうすれば、道は開けます。加計小学校で学んだこの経験を皆さんの進む道で生かしてほしいと思います。

最後になりましたが、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。立派に成長された姿を見られ、感慨ひとしおのことと存じます。六年間お子様方をお預かりし、至らない点もたくさんある中、本校教育に多大なるご理解とご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。これからもお子様が健やかに成長されますよう教職員一同、心よりお祈り申し上げます。

加計小学校は今年創立１５０周年を迎えます。皆さんが残してくれた１４９年目のページを大切に受け継ぎ、未来に繋ぎたいと思います。

旅立ちに一句

「雪解けて集う川波大海へ」

いよいよ未来への船出です。卒業生の皆さんの未来に、たくさんの幸せが待っていることを祈りつつ、式辞といたします。



令和７年３月１９日

安芸太田町立加計小学校長 萩
原英子